



神医 FAXニュース 第564号

編集・発行 神奈川県医師会

毎月第1・第3水曜日発行

TEL.045-241-7000

FAX.045-241-1464

インターネットホームページ
http://www.kanagawa.med.or.jp

医療・介護、「3%以上」賃上げを

—日医・松本会長、改定に向け—

日本医師会の松本吉郎会長は25日の会見で、2024年度トリプル改定に向け、医療・介護従事者の「3%以上」の賃上げを求めていく意向を示した。賃上げの財源は、原則的に基本診療料に充てるべきだとの考えも示した。

●「基本診療料」で対応を

岸田文雄首相は、3%以上の賃上げを財界などに要請している。松本会長はこれに言及し、「医療・介護従事者も労働者。職種などによる多少の違いはあるが、全体としては他産業の労働者と同様の賃上げの必要がある」と主張した。賃上げ財源の配分は「改定率が決まった後の話になる」とした上で、「引き上げになれば、当然ながら初・再診料、入院基本料などの基本診療料での対応を、まずは求めたい」とした。

●医療・介護の賃金増、「経済を活性化」

22年度診療報酬改定では、首相の意向で、看護職員らの賃上げを図った。松本会長はこれが引き金となり、各産業で賃上げが実現したと指摘。しかし、医療・介護の賃上げは一部に限られたとして、現在は「他産業に大きな後れを取っている」と問題視した。「医療・介護従事者の賃金を引き上げることで、わが国全体の賃金上昇と、経済活性化が見込める」と強調。新型コロナ補助金による内部留保を賃上げの原資にすべき、との財務省の主張を念頭に、「賃上げはフローで行うべきであり、感染対策のために使うストックを原資とするものではない」と訴えた。

●20～21年度の医療費損失、「3.2兆円」と試算

物価高騰やコロナが医療機関の経営に及ぼした影響にも言及した。15～22年度の医療費の平均伸び率が1.79%だったことを踏まえて試算すると、コロナ禍の20～21年度の医療費の損失額は計3.2兆円と見込まれると説明。「その減少のダメージが残っている」と述べた。地域の病院が閉院・閉院予定に追い込まれている状況が報道されているとも指摘。「地域を支える医療機関が閉院になると、人はそこに住めなくなる」として、支援の必要性を訴えた。コロナ補助金による内部留保の積み上がりは、「今後の感染対策に活用しなければならない」とした。今後の感染症対応に向けた体制整備や医療DX推進に「医師会は役割を果たしていく」と話した。メディアファックス10月26日

21年度の国民医療費、45兆359億円

—前年度から2兆円増—

厚生労働省は24日、2021年度の国民医療費について、前年度から2兆694億円増の45兆359億円だったと発表した。人口1人当たりの国民医療費は35万8800円で前年度から1万8200円増えた。診療種類別に見ると、内科診療医療費は32兆4025億円（前年度比1兆6212億円増）だった。その内訳は、入院医療費が16兆8551億円（5198億円増）、入院外医療費が15兆5474億円（1兆1014億円増）。そのほか、歯科診療医療費は3兆1479億円（1457億円増）、薬局調剤医療費は7兆8794億円（2314億円増）、療養費等は4725億円（123億円増）、訪問看護医療費は3929億円（675億円増）だった。入院時食事・生活医療費は7407億円の前年度から87億円減った。内科診療医療費の傷病分類別は、「循環器系の疾患」6兆1116億円、「新生物（腫瘍）」4兆8428億円、「筋骨格系および結合組織の疾患」2兆6076億円の順に多かった。「損傷、中毒およびその他の外因の影響」は2兆4935億円、「腎路生殖生殖器系の疾患」は2兆3143億円だった。財源別は、公費が17兆1025億円（6034億円増）。このうち国庫は11兆4027億円（3782億円増）、地方は5兆6998億円（2252億円増）だった。保険料は22兆4957億円（1兆2316億円増）で内訳は、事業主が9兆7376億円（5893億円）、被保険者が12兆7581億円（6422億円増）。患者負担は、5兆2094億円の前年度から2578億円増えた。制度区分別では、公費負担医療給付分が3兆3136億円（1914億円増）、医療保険等給付分が20兆5706億円（1兆2053億円増）。後期高齢者医療給付分は15兆7246億円（4378億円増）、患者等負担分は5兆4270億円（2348億円増）だった。

メディアファックス10月25日

図2 診療種類別国民医療費構成割合

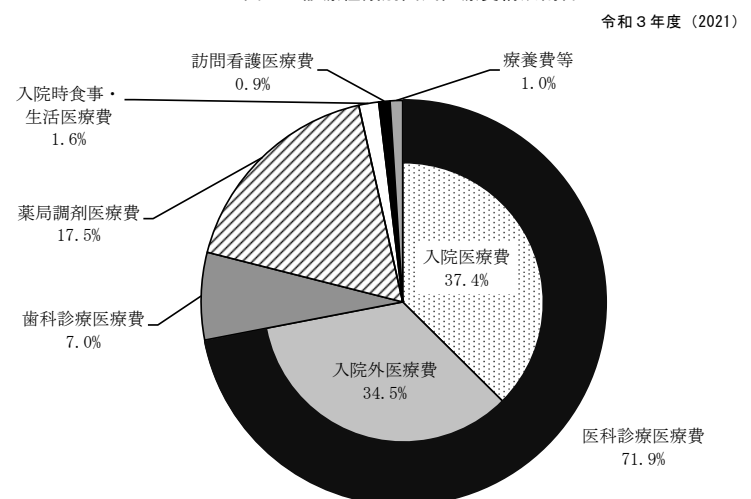
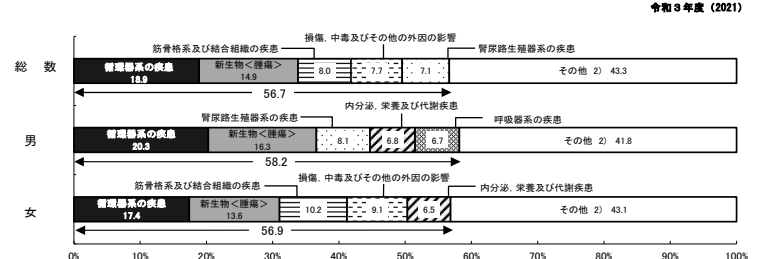


図3 性別にみた傷病分類別内科診療医療費構成割合(上位5位)



グラフ出典：厚生労働省2021年度国民医療費の概況より

～医業承継検討してみませんか？～

神奈川県医師会では、後継者で悩んでいる先生、開業をご検討されている先生方をサポートするため、相談を受け付けております。

【お問い合わせ】

公益社団法人 神奈川県医師会

担当：病院診療所支援課

電話：045-241-7000

FAX：045-241-1464

メール：sien@kanagawa.med.or.jp



最	旬	医	界	
		情	報	

医師臨床研修マッチング、内定者8968人

—協議会が発表—

医師臨床研修マッチング協議会は26日、2023年度の医師臨床研修マッチング（24年度研修開始）の結果を発表した。希望順位の登録者9913人のうち、今回のマッチングで臨床研修を受ける病院が内定したのは8968人（内定率90.5%）。大都市部のある6都府県（東京、神奈川、愛知、京都、大阪、福岡）以外の41道県の内定者数は5289人で、全体の59.0%だった。第一希望の研修先とマッチしたのは5770人（64.3%）だった。対前年度比で内定者数が増えた上位5県は、▽山形（22年度56人→23年度75人、対前年度比33.9%増）▽奈良（98人→126人、28.6%増）▽長崎（89人→111人、24.7%増）▽青森（73人→85人、16.4%増）▽石川（83人→95人、14.5%増）一。医師臨床研修マッチングは04年、医師の臨床研修義務化に合わせて導入された。臨床研修を受けようとする医学生らと、臨床研修を行う病院の研修プログラムの組み合わせを、双方の希望を踏まえつつ、一定の規則に従って決める。メディアファックス10月27日

夢持ち続けた姿、伝えたい

—カリコ氏との交流を小説に—

福岡県柳川市の開業医村石昭彦さん（64）は約30年前の米国留学中、ノーベル生理学・医学賞に決まった米ペンシルベニア大のカタリン・カリコ特任教授と交流を深めた。2人は別々の道を歩み、コロナ禍を経て再び連絡を取り合うことに。「日の目を浴びなかった時でも、夢を持ち続けた彼女の姿を伝えたい」と、旧友との日々を描いた小説を昨年、出版した。「いつも笑顔で飾らない、原石のような人」。古びた写真を懐かしそうに見つめる村石さん。自身の隣で笑う女性が「メッセンジャーRNA（mRNA）」を使った新型コロナウイルスワクチン開発の道を開いたカリコさんだ。出会いは1993年、村石さんは同大で遺伝子治療研究に励んでいた。分野は違うがハンガリーと日本という他国から来た者同士、故郷や家族について話し、悩みを分かち合った。無名の彼女を訪ねる人は少なかったが、遅くまで一人残る研究室に村石さんが足を運んでは互いの夢を語った。「周囲のエリートと違い、よれよれのセーター姿で愚直に取り組む研究者だった」村石さんは94年に帰国。循環器内科医として開業し、仕事に没頭した。時は流れ、新型コロナで父や患者を亡くした2021年、何げなくつけたテレビから、懐かしいなまり方の英語が聞こえた。画面に映るカリコさんは、あの頃と変わらぬ笑顔を浮かべていた。22年4月、科学分野の授賞式でカリコさんが来日すると知った。滞在先のホテルに村石さんのめいが留学時代の写真と手紙を預けると、翌日にメールが届いた。「アキ、なんてうれしいサプライズ。全然有名じゃない私の研究室に何度も来てくれて、うれしかった」。近況や思い出話をやりとりし、村石さんの父の死を知ると、「ごめんなさい。ワクチンをもっと早く完成させたかった」とのメッセージが送られてきた。村石さんは、こうした経験を小説「カリコ博士と町医者賞の面影、夢の途中」に記した。「夢は花開くこと、そうでないこともあるけれど、持ち続ければすてきな未来が待っていると教えてくれた。若者よ、夢を持とう」。力強く話した。【共同】メディアファックス10月17日

診療所の感染症対応、向上へ「モデル研修

—日医、来年3月に—

日本医師会は25日、診療所で新興感染症への対応力を高めるためのモデル研修を、来年3月に開催すると発表した。都道府県・市区医師会が手がける研修の参考にしてもらいたい考えだ。釜沼敏常任理事が会見で説明した。モデル研修の実施に向け、プログラム、教材、実施方法などを検討するプロジェクト委員会（委員長＝舘田一博・東邦大教授）を立ち上げ、25日に初会合を開いた。今後、来年1月にかけて検討を進めた上で、モデル研修を実施。事後検証などを経て、都道府県・市区医師会への拡大を目指す。釜沼氏は、新たな感染症が発生した際、「外来を担う診療所でより多くの患者に対応できる体制を構築していくことは極めて大事だ」と述べた。委員会の初会合では、「平時の診療から、感染対策を意識しておくべき」「ある程度、感染症の情報が明らかになった時点で、厳しい感染対策をどのように緩めていくか検討すべき」といった指摘があったという。

メディアファックス10月26日

小学生ドクターが「診療」体験

—キッズニア東京—

日本医師会などがキッズニア東京（東京都江東区）に期間限定で開設した「診療所パビリオン」が18日、オープンした。初日は、埼玉県深谷市から訪れた小学生4人が、脈拍の確認や心音の聴診など、基本的な臨床医の仕事を体験した。診療所パビリオンは、臨床医の仕事を疑似体験して、かかりつけ医の仕事を身近に感じてもらうことが狙い。健康への意識向上も促す。11月7日までの限定で、日医と、キッズニアの企画・運営を行う「KCJ GROUP」が共同で手がける。対象年齢は3～15歳。体験を終えると、「給料」として、専用通貨の8キッズを受け取れる。「医師資格証」も交付される。

●医師になりたい思い、「強くなった」

初日に訪れた子どもたちは、日本の医療体制や皆保険制度について、スタッフから説明を受けた。その後、患者に見立てた人形を相手にして、聴診器を使った心音確認などの診療と、骨折した患部にシーネ（添え木）を当てる応急処置を体験した。スタッフは、患者の安心のために、「しっかりと声かけをしましょう」と指導。子どもたちは、励ましの声をかけながら、真剣な面持ちで“患者”と向き合っていた。鈴木楓太さん（6年生）は、インフルエンザにかかった時に世話になった医師に会え、将来は「医師になるのが夢」。「体験を通じて医師になりたいという思いが強くなった。患者さんのことを思いやれる医師になりたい」と話した。田部井柚季さん（6年生）は、幼いころに訪れた病院で、スタッフの笑顔が「すてきだった」ことが、医療従事者を目指すきっかけになったという。将来は薬剤師志望だ。「機会があれば、お薬に関する仕事も体験できれば」と意欲を示した。

●「人生に寄り添う仕事」を伝えたい 日医・松本会長

会場には、日医の松本吉郎会長ら役員も姿を見せ、子どもたちの体験を見守った。記者団の取材に応じた松本会長は「子どもたちの真剣な表情は、私たちと同じ医師そのもので、うれしかった」と述べた。「医師の仕事が患者さんの人生に寄り添って支えていく素晴らしい職業だという私たちの思いを、伝えていきたい。同時に私たちも、地域の医療を支える仕事にしっかりと取り組んでいきたい」とした。今月、孫が生まれたことも明かした。「もう少し大きくなったら、ここに連れて来たい」と笑顔を見せた。メディアファックス10月19日